

天理大学附属天理図書館所蔵吉田文庫本『御禊行幸記』

石田実洋

(解題)

天理大学附属天理図書館所蔵吉田文庫本の中に、『御禊行幸記』と題された部類記が存する。同文庫目録⁽¹⁾の祭祀、大嘗祭・新嘗祭の項(吉四一)に、

御禊行幸記 写大一冊

四四七

〔下部兼敦〕筆

と記載されているもので、その書名の如く、大嘗祭に際して事前に行われる御禊行幸に関する記録である。

まず、その書誌についてまとめておくと、分類番号・請求番号は、吉四一―四四七。袋綴じの冊子本一冊で、全二十九丁、墨付も二十九丁。法量は約二六・六糎×二一・一糎である。第一丁表の中央に、昭和四十二年十二月一日付の天理大学附属天理図書館の楕円形登録印が一顆、第二丁表右側の中程に印文「天理図／書館蔵」の方形朱印が一顆、第二丁表の右下に印文「吉田文庫」の方形朱印一顆がある。

黄土色の表紙左上には、打付で、

御禊行幸記

との外題が記されている。また、表紙見返し中央に貼紙があり、

御禊行幸部類御記目録

との記載を有する。

第一丁裏には、左記の如き目録が記されている。

御禊行幸部類御記目録

後朱雀院 長元九

順徳院 建厂二

伏見院 正應元

光嚴院 正慶元

光明院 曆應元

後圓融院 永和元

なお、第一丁裏にこれ以外の墨付はなく、第二丁表と第二十九丁裏にも墨付はない。

さて、この目録にみえる如く、本書は後朱雀院・順徳院・伏見院・光嚴院・光明院・後円融院の六代における御禊行幸に関する記録を収める部類記であるが、本書における所収丁数や、所収年月日などをまとめておくと、左の如くである。

第二丁表―第三丁裏

後朱雀院 長元九年十月二十九日条

第四丁表―第七丁表

順徳院 建暦二年十月二十八日条

第七丁表―第十一丁裏

伏見院 正應元年十月二十一日条

第十一丁裏〜第十七丁裏 光嚴院 正慶元年十月二十八日条
 第十七丁裏〜第二十三丁裏 光明院 暦応元年十月二十八日条
 第二十三丁裏〜第二十九丁裏 後円融院 永和元年十月二十八日条

これら六つの記録は、本稿では紙幅の関係上、詳述することはできないが、一人称が「朕」であることが多い点からもわかるように、内容上、いずれもその当時の天皇自身の日記と考えられる。さらに、伏見院の宸記は、当部所蔵の伏見宮本『伏見院宸記』⁽²⁾の中に同じ記事を見出せ、光明院の宸記は、国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本の『御禊行幸御記』⁽³⁾が本書同様に光明院宸記の暦応元年十月二十八日条を収めるが、残る四つの宸記は、いずれもこれまででいられていなかった逸文と思しい。⁽⁴⁾

半丁九行で、朱の首書が多くみられるが、その文言からみて後補のものであろう。すなわち、各宸記にもともと存したのではなく、本部類記が編まれる際に付されたものである可能性が高い。その他、光嚴院宸記部分には本来は裏書であったという傍書が、後円融院宸記部分にも傍書がある。

本部類記の書写年代については、前述の如く、吉田文庫の目録は吉田兼敦の筆とする。筆者は兼敦の筆跡を確認した経験に乏しく、いま、それを判別する能力をもたないが、本書の後円融院宸記部分に、兼敦の父兼熙と思しき人物を「兼、」と表記している箇所がある。これが兼熙に敬意を表し、その諱を完全なたちで書写することを避けたものとすれば、目録の記載は正鶴を射ている可能性が高い。もし、目録の記載の如く兼敦の書写したものであるとすれば、彼の存生中、大嘗祭が行われたのは、後円融院の永和元年と後小松院の永徳三年の二度であり、前者は兼敦がまだ十歳にも満たないときのことであるから、本部類記は後小松院の大嘗祭に際して編まれた可能性が考

えられよう。⁽⁵⁾ いずれにせよ、全体の様相などからみても、室町時代中期を大きくは降らない時期の書写とみてよいのではないだろうか。記して後考を俟ちたい。

末筆ながら、本書の調査や翻刻許可（翻刻番号一三四八）の際などには、天理大学附属天理図書館に非常に御世話になった。記して謝意を表したい。

註

- (1) 天理図書館編『天理図書館叢書 第二十八輯 吉田文庫神道書目録』（一九六五年、天理大学出版部）。
- (2) 伏見院宸筆本。函架番号は伏―五二〇で、全八巻。そのうち、第七巻が御禊行幸から大嘗祭にかけての別記となっている。
- (3) 資料番号はH―六〇〇―一八〇で、旧番号は、せ函三八。袋綴じの冊子本一冊で、江戸時代前期の書写とみられる。
- (4) 各宸記については、他の天皇の宸記もあわせ別稿を準備中であるが、現在において和田英松『皇室御撰之研究』（明治書院、一九三三。後に国書逸文研究会より一九八六年に復刻）・米田雄介『歴代天皇の記録』（続群書類従完成会、一九九二年）がまず最初に参照されるべきものである。
- (5) 勿論、兼敦は本部類記の編者ではなく、これを転写した一人に過ぎない、という可能性もあるが、管見の限りでは、他に同じ内容の部類記は現存しないようであり、当面、本書を本部類記の編纂原本とみておきたい。

〔凡例〕

一、本書には首書が多く、それ以外の傍書も存することなどから、本翻刻では、極力底本の字配りを保存せんと努めた。

一、校訂注記も最低限にとどめた。

一、古体・異体・略体などの文字は基本的に正体に改めた。

一、朱書には、その首尾に鈎括弧を付した。

一、各丁表裏の最終行には、その下に、例えば第一丁表を「(1オ)」、第一

丁裏を「(1ウ)」などと略記するかたちにて、その旨を示した。

(翻刻)

長元九年 後朱雀院

大嘗會御禊

十月

〔頓宮行幸事〕
廿九日癸酉天晴此日緣大嘗會出鴨川修禊被其儀未三剋諸司參集之乃出南殿陰陽頭孝秀於

御帳西邊返閉了左右大將代左近中將藤原朝臣右

近中將藤原朝臣等立南階左右近仗陳列訖乘鳳輦

出承明建禮〔出建禮門間節下先發五位已上〕待賢等門從大

宮大路南行出二條大路到河源頓宮駕行列儀

〔(2オ)〕

式如鹵簿圖於頓宮西垣門外神祇大副兼輿進御輿〔神祇官獻御麻事〕

南邊獻御麻〔須自荒垣南外乘之然〕自取之一撫一唵、

不取串杖〔只取麻末〕返給公卿列立御輿北邊欲入御膳幄然裝

束司先令主殿寮撤禊幄屏幔仍趣禊幄間令左

近中將良賴朝臣問諸卿言近例先御々膳幄然先向禊

幄如何諸卿持議待關白到覽令良賴朝臣進仰諸卿相定

可行之由即大納言藤原朝臣等申之日景漸闌禊剋

〔直著御禊幄事〕

〔役〕

既到尙先可御禊幄歟者仍從。駕著禊所幄坐

〔供御手水事〕

〔具賴朝臣供奉之〕

百支帳中大床子須臾關白參來乃供手水〔其座在帳中大〕神祇官御巫等四人供御贖

〔供御贖物事〕

〔舊記云宮主巡檢祭物祭主直捧御麻〕

物列置御座前畢一巫更獻御麻〔中臣氏女傳獻之以御撫物盆授御巫訖然今度〕返給之後宮主神

〔公卿解除事〕

祇少祐伊岐則政於禊幄巽角奉仕御被公卿百官共

〔於御膳幄供御膳事〕

解除訖宮主出置幣沙壇流幣物河中神祇官人等

〔散末之後乘〕

腰輿遷膳幄坐輕幄倚子〔掌侍滿子持御劍掌侍貴〕

〔子取璽宮輕幄〕

置物机上 采女供御膳之後移居輕幄北平敷座

〔大臣問獻物事〕

御廚子所供小膳次內大臣候東面南第二間簾前山城國

司等獻物并捧進出御膳幄巽角列立〔北面〕大臣問之

〔大臣奏見參事〕

了仰可賜膳部之由國司引退大臣退下次大臣進南

〔還幸事〕

第一間持見參文付掌侍貴子奏之覽了返給々祿

之後乘輿還宮御輿入建禮門問祭主神祇伯大中

臣朝臣進御麻下輿之後少納言經成奏鈴勅答訖左

近中將資房朝臣誰何公卿稱籍退出乃還本殿于時亥二

點此日左大臣奏聞如供奉女御代

〔(3ウ)、以下空〕

〔(3ウ)〕

建曆二年 順德院

大嘗會御禊

十月

廿八日庚子天晴風靜今日大嘗會御禊也自曉天出立

〔浴殿事〕

先早且有湯次每日拜其後徐出立此間五位藏人

宗宣催諸司日出程人々徐參集而女御代右大將別

〔南殿出御事〕

當遲參此間朕裝束範朝 範茂黃櫨染如恆其後出南殿內

侍二人在前後次將付之此事上古必不然近代定事也次

有反閉朕立廂右近次將度階下公雅朝臣 已下次公卿列立先內

〔頓宮行幸事〕

大臣次右大將經階下立橘樹東邊次公卿列立九條大納言 已下次

寄御輿無闌司鈴奏等依神事也次二位中將教家昇南

階置弓進開輦進取劍入御輿次朕乘輿無警蹕

教家取草鞋縵入下襲取璽入之閉輦退下次昇

下御輿於階下出承明建禮兩門無御綱仰次人々騎馬

其後於待賢門內良久出大宮大路又數剋諸司諸衛度之

間殊久也未時徐過郁芳門女御代出立樣自去年者神

〔院御棧敷前事〕

妙也御輿過時如前驅在轅下至二條東行棧敷車

無所徐過院御棧敷之時自本祇候公卿起座退前太相國 右大臣

〔御輿寄御輿事〕

御隨身候西方事々同去年宗行朝臣候階前其後無

指事剋限至間直寄御輿先教家卿取劍朕下輿

〔供御手水事〕

次賴實取璽進帳內置之南方 也其後頭中將通方供御

〔供御贖物事〕

手水有椽役送五位藏人次祭主代隆宗朝臣能隆卿 子供麻

先是供贖物同去 年此間左右近衛次將引陳去年東上引

之今年西上引之以何可爲指南哉御禊了寄腰輿

同去 年至御膳幄其時諸人著淺沓同去 年其時諸卿皆立中

〔腰輿至御膳幄事〕

納言忠房一人居地也寄腰輿於御膳幄教家取劍可

〔供御膳事〕

授內侍而直置机上如何次下輿事々如例次采女供御

膳次陪膳經通參役送五位職事爲此役有催六位

人尾籠也抑於御輿幄先供贖物依大中臣朝臣 申狀也抑移御膳

幄之時資實範茂ハ著靴是院仰也其外ハ淺沓也又於

御膳幄教家直置机事且叶吉例天仁內侍遲々之間

〔奏見參同獻物事〕

如此歟下輿時不取草鞋事ハ無風情忘歟其後徐取

松明節下奏見參先是問獻物此間內膳遲參之間

〔公卿祿事〕

奉行史國宗宿禰直付進物所是有例事也次公卿祿近

〔還幸事〕

衛將執之此間祿唐櫃在北堺東央也不同去 年又節下大

臣取祿次第了寄御輿劍璽役教家內侍授 事々無

指事五位職事資賴進草鞋路頭無指事院御

棧敷前照松明御見物也至大內少納言家時奏鈴名謁

雅經朝臣問之

一 今日左衛門督代保季朝臣馬忽留棧敷前不行仍下馬

不度大路

一 諸衛尉一人於御棧敷前落馬

一 九條亞相馬不堪鞍馬兩度下馬但始終無指事

今日供奉人

節下 左大臣良輔以瀧口爲 馬副女御代前右大臣忠經女

裝束司長官權中納言光親 次官左中辨定高

前次第司 別當有雅 後次第司參議左衛門督隆清此兩人久不見者也

只供奉公卿

內大臣 左大將 右大將 公房 大納言通光 良平 中納言忠房 雅親 公宣 忠信

〔5才〕

〔4才〕

〔4ウ〕

〔5ウ〕

二位 教家 宰相賴平實氏 公氏顯後 忠信 隨身著染裝束如何

左將 中將經通頭雅經 資實 家行 少將通時公棟 基保實俊 敦通實經

右將 中將通方頭公雅雅清家信 家嗣 範茂實時時賢 少將敦通實經 宗平 親實

還大內後以光親自院有御使今日無風雨難之上殊

無為々悅之由被申誠悅入去年事々有相違而今年

無為天下吉慶何事如之哉

正應元年 伏見院

大嘗會御禊

十月

廿一日辛酉天晴微雨間降今日為禊除幸河原頓

宮卯刺奉行職事賴藤參次第催促之已一點中納言

家教卿參同斜關白參不追 前 此後相續公卿等參節下

左大臣參著仗座賴藤出陳仰次第司以下假帶劍

事先之供御湯了內藏寮御服遲進之間數度責

之又女御代數反雖相催及午半未參依有例且

仰可出之由於關白即反閉賀茂在秀朝臣自西方進

先之內侍二人取劍璽立母屋簾外母屋相等御簾 垂之也 反

閉了陰陽師退出賜祿 兼 次寄輿於正廳後房南面儲

御輿寄 公卿等列立庭中西北面 無闌司鈴等奏五位藏人

兩人顯世 賴藤 參進卷廂中央間御簾次頭中將宗實朝臣

參進開輦戶入自階間取劍入輿內退候西實子

次乘輿關白取裾次宗實朝臣取璽入輿中出東

門之間節下左大臣著標下床子鳳輿進北之間進

立伺氣色歎雜人立隔之間不見及召外記仰行鼓

事次節下已下騎馬次將少々於節下前欲騎馬之

間大臣追卻之云々 持節旗者馬疲旗重之間度々

欲倒相構渡之女御代車待立定之間數剋昇立輿

抑之院御棧敷閑院御所跡也西園寺大納言造進云々

北者引幔供奉人等令渡其內實兼卿一人祇候實子御

輿過之間居庭上雅藤朝臣候仰申供奉人歎殿上人

等候東方輦過御棧敷前之後少將隆教朝臣落馬然而

無為云々 又權中納言良宗卿所騎之馬頻沛艾揚而

走出之間不至御棧敷前留路頭西半到頓宮寄

輿於御膳帳東面中央間地上 敷筵 左右大將在幔外左居 右立

宗實朝臣進上御簾開輦戶取劍授內侍兼居儲 者也

為兼朝臣持參草鞋下輿之後宗實朝臣取璽授內

侍乍持璽筒閉 輦戶尤失也 兩人取劍璽之由見仁治記仍兼仰其

由之處俄如此宗實朝臣老耄歎將又奉行不仰含歎

于時關白未參暫相待之間家教卿密々設破子於西

面行之家教卿為兼朝臣等祇候頃之關白參之間即欲

幸御禊幄召腰輿之處未張蓋乘御之後可張之由

稱先例申之次將等申云乘御之後御輿長等可奉張

之條有其恐又次將等張之條何時例哉仍猶兼張之

誠可然歎此間及昏黑寄腰輿次將等著淺履相副之

為兼朝臣獻草鞋宗實朝臣參進卷御簾取劍璽入腰

〔(7ウ)〕

〔(6ウ)〕

〔(8ウ)〕

〔(7才)〕

〔(8ウ)〕

〔腰輿寄御帳事〕

輿即直南行大將前行關白近候輿左頭寄腰輿於

御禊帳西面中央間地上敷筵宗實朝臣進取劍披百子帳後

屏風置大床上南方先開屏風之後次下輿不獻草

〔不獻御草鞋事〕

鞋此事先例不詳之間不獻之由關白申之著大床上座東面

仁治獻御草鞋之條勿論歟如何々々

〔供御手水事〕

次為兼朝臣取壺置大床上北方可置御劍閉屏風

退次可供御手水之由關白催之主殿寮昇御手水案

立巽角砌此事尤不審先例每度自西方供之歟

今度儀就關白所存如此歟奉行職事無申旨尤不

審次宗實朝臣進自東方候屏風內平敷御座南頭藏人

兵部少輔藤原顯世持參御手洗手洗上自巽方供之

宗實朝臣取之置大床上南方先例於南面供御

手水之由關白申之間忽向南方御劍置大床上南方之間無

於北可置手洗之所仍自令押遣劍次中盤上置銀器四口皇后宮大進藤原賴藤

持參之次右衛門權佐俊光持參宗實朝臣取之候

手洗上乍置貫簀聊洗手不歟次本役人等次第

參取御手水具退出宗實朝臣退出於南面供御手水事

以此旨示關白之處先例也且仁治如此之由類申之間逐於南面供之了

奉行職事又同關白所存歟仁治御手水於東面供之歟代々東面西面不

同也南面之例何度例哉供御手水之路披百子帳後屏風廻大床子

南頭自東面供之者例也自西面供之時披帳後屏風其時向西令洗御事也

次移著平敷御座東面頭中將藤原為兼朝臣持參笏即取

之持之次自巽一間巫子四人獻御贖物節折命婦傳

取之供之四折敷先御手巾次輿形次次宮主捧大麻持參

祭主取之進東面第一間節折命婦傳取之獻之

取之一撫一吻之後返給節折々々給之返給

祭主々々返給宮主先之御幣奠物等置河邊此

間居關白祓物五位藏人等役之公卿祓物等神祇官

人役之次宮主取大麻參著巽庭賦奏解除詞

祓詞了間解繩撫人形此間大炊寮官人散五穀歟不

見次解除了宮主付大麻於五位藏人取之獻關白撫

了返給次宮主引公卿大麻次巫子進節折撤御贖物

次出自御帳西此間寄腰輿宗實朝臣持參御草

鞋至還御之時何可獻哉就中宗實ハ可取御劍何取

草鞋哉仍追返之間置草鞋取劍入腰輿次乘

輿此間稱警蹕次為兼朝臣入壺宮即歸御膳幄少

納言平兼有鈴奏次可供御膳歟之由賴藤朝臣申之

而仁治度以久壽例被略之仍可略之由仰之此間供腋御

膳陪膳役送女房歟之此間大臣奏山城國司事

歟不慥聞大臣著御前座次獻物列立東庭數度催促

人立之甚乏少大臣問之各雖可稱物名都以不稱之大臣類

雖仰都以不得其察之體也數剋之後大臣可賜膳部

之由仰之然而不稱唯不退出仍大臣稱可罷出之由

仍退出大臣起座次大臣進南第二間奏見參

見參插杖內侍取之見了返給大臣取之右廻而退

出次昇出祿辛櫃關白祿為兼朝臣取之為請取之

隨身自北方欲渡御前關白自簾中鳴笏追返之

〔10才〕

〔9才〕

〔9ウ〕

〔10ウ〕

〔11才〕

仍廻自西面取之内大臣祿、取之内府不拜如何
〔還幸事〕

次節下大臣令打行鼓寄御輿宗實朝臣安劍璽
如初出西幔門之間雅樂寮奏立樂即還宮事々

如例自今日至大嘗會日神事也

正慶元年 光嚴院

大嘗會御禊

十月

廿八日甲子從寅剋雨下辰一剋休及晡霽此日臨

東流禊除來月以可行大嘗祭也丑四剋藏人頭賴

教朝臣參上催所司供奉官等然而各遲參賴召賴

教朝臣仰左右近將一兩參上者即先欲乘輦及

遲明參入之輩悉後日須令解官之狀而尙遲怠

近代之風更以可歎々々卯二剋遣手狀於關白第仰即

時須參來既而欲駕輦事以遲々者太不可無便同

〔浴殿事〕 四剋沐浴著裝束 黃櫨染 衣竝如恆 此際天已曙辰二剋關白參

〔於朝所御拜事〕 來 隨身發前音如何 但猶可尋者也 小時於朝所南面東第一間拜神如每朝

同三剋左大臣參上陣仗座令藏人頭賴教朝臣仰次第

〔頓宮行幸事〕 司次官主典已上假令帶劍即剋寄鳳輿於後房

南面先是出自母屋中央間 關白褻簾賴教朝臣 獻草鞋 立簾前廂

掌侍藤原成子權掌侍平朝子持神靈寶劍立左右 尋常 裝束

次參議右近中將實繼朝臣參進立西檻下 此日右近大將藤原朝臣 不參仍以實繼朝臣爲代

又公卿等未列立已前於誤進御輿奉行者失也 即昇殿進寄卷廂

公卿等又爲騎馬早出以外不參列相違先規歟

〔11ウ〕

中央間簾 有鈞先例或五位藏人卷之 今依延慶元年例也 取劍安輿內退候西方

次駕輿次將等不稱警又關司不奏少納言不請鈴竝

依神事也賴藤朝臣取插鞋給東童 須取劍璽次將供奉之 而近代常如此今日依近

例不及 改之 次安璽如常即進鸞輿於東門漸進北爰左

大臣起自節旗下床子座 本自著座歟外記及 兵庫頭等在後 頗進前伺氣

色即復座仰外記令兵庫頭賀茂在維擊行鼓次大臣

起座前行此間左大將藤原朝臣參入大將次將等於門內騎馬

即出待賢門 往古常用美福門近代 又多如此歟先規不同也 於待賢門大路扣輿給

移剋依前後陣行列未能整也此間頻從院御車以

〔院御敷敷前事〕 下藹御隨身被催促院御車被立二條萬里小路 網代廂 歟先例

皆有御棧敷而延慶元年被立院司右少辨國俊候轅邊乘

裏書云輿過前之間公卿侍臣等參避座跪地從輿之武官等

去御車許丈暫扣輿從御車以左近將曹秦延方可進輿之由

〔御輿至頓宮事〕 又執弓如常申一剋到頓宮供奉諸司等依次下馬裝

有仰即進駕又延慶二年先皇御日記云於御車前聊

束司長官大宰權帥藤原朝臣次官左中辨經季朝臣已下

昇向御輿是御對面之由歟云々此事未辨是非仍今日不然

列立西幔門南邊迎謁大臣下馬著節旗下床子次諸

卿下馬列立西幔門外北邊 西上 乘輿過之時大臣及羣卿

磬折次入西幔門 大將不 改陳 伶倫不舉樂神祇官 祭主從三位 大中臣朝臣

獻大麻 進自御輿 左即退 此間右近中將國平朝臣奏云御輿路公卿輿

南北先例兩樣也此日如何令仰云時剋已至直幸御禊輿

〔御輿直寄御禊輿事〕 者宜經公卿輿南爲先幸御膳輿之時可經輿北者此事

〔13ウ〕

〔13才〕

裏書云 先例必不然只南北隨時不問也然而此皆有便而已仍所
今日依吉時已至直幸祓殿蓋長元建曆之例也

仰也即經公卿帳南寄輿於禊帳西面中央間地上敷掃
近來常雖時烈至必先幸御膳帳然而今日

部寮延安輿次將等羣居庭上左大將藤原朝臣立北右近
事早速依時至直幸祓殿其理尤可然也

中將實繼朝臣在南關白未參入仍暫相待不下輿須臾關
此間有雜人闖亂事但不及一顧

白參來實繼朝臣參進披輦戶取劍入百子帳後屏
風 西柄或取劍重次將開之 襄同帳帷置大床子上南方歸
南刃而今兼開之

出候西面實子北邊次下輿賴藤朝臣獻插鞋關白取
裾經筵道上 至百子帳下敷 入自帳後 賴教朝臣 就大床子上
筵道布單 襄帷

〔公卿將置劔重事〕 次實繼朝臣取劔置御座右如前 劍柄
圓座 豫敷 襄帷 內方

御劔或置御座左大床子北方然而東面北面御座之時劔必置右南面西面座之時
必置左也清涼殿劔即如此儀先例多失之古賢多失之由歟如何具見鳥羽院御記
今以彼御說令置座右而已又執劔重之次將先例每兩人執之而此日參入上輿
次將等或幼少或不憶之事仍實繼朝臣一人令執之又久壽二年例也而已凡
兩將執劔重之時或下御已前執劔重左右前行或又下御之後 次節下大
執聖皆說々也今朝一人役此事仍下與之後令執之

〔次將等不引陣事〕 但不見其事 左近中將實兼朝臣令
臣令擊靜陣鼓 任式記之 藏人親名尋陳可引

哉否於關白々々答云於御禊帳者不可引之由返答仍不引歟此事如何關白定有
所思歟但頗有疑於祓殿引陣之年來例也而近代或不引頗雖非本儀爲近例
之間不能加言資兼朝臣 諸卿著祓座主水司供水藏人頭
頗存故實尋申歟

宗兼朝臣取打敷參進入自帳東面敷大床子上 初敷平敷座
大床子座上也凡供打敷事先例常不然而久壽二年仁安三年用之而仁安
三年記文用打敷先例不然而之由難之又建曆二年御記仁安三年之外不
用打敷仍令撤之云々而久壽二年記又敷打敷之由詳注之凡非恆例仍
不可用之由兼雖令仰今忽供之是又非無先例仍不能禁止

〔供御手水事〕 宗兼朝臣留候藏人顯藤親名等益供水具宗兼朝臣
取之立置打敷上悉供了向南洗手 手洗頗引寄南方劍
盥聊押寄西方

宗兼朝臣取椽渡之洗了 不嗽 宗兼朝臣獻巾拭手訖即返

〔14ウ〕

給次撤手水具 次第傳之 次移著平敷座坐茵上 下自大床
如供儀 子前

〔供御贖物御祓事〕 賴教朝臣獻笏次神祇官人供贖物 四折 御巫四人就殿巽
角取贖物授中臣女々々傳取之置御座前悉供訖

次祭主從三位大中臣朝臣捧御麻就南第二間砌下奉
之中臣女取之參來乍令持命婦一撫一吻 但懸笏 之後

命婦持退返賜中臣朝臣々々退給宮主先之置幣
〔關白已下祓事〕 帛奠物等於河邊次居關白祓物 五位藏人役之良久不置仍
相尋之元來不設云々 問其故於關白々々召藏人親名
太奇怪良久適置之 神祇官人居公卿祓物次宮主取御麻著

殿巽角庭軾奏解除詞此間上下解繩無人形如常
此間大炊寮散五穀解除訖關白已下諸卿撫大麻次撤

贖物祭物等投河緣撤贖物之後還坐大床子 著自座 寄
腰輿於帳西面 南 參議實繼朝臣參進襄帳帷取劔安
〔還幸事〕 輿內次降自大床子西 關白 經初路駕輿左大將藤原
〔賴教朝臣獻草鞋〕 襄帷

朝臣始稱警次將等應之次安聖次進輿幸直會
左近大將及實繼朝臣等前行羣卿列立帳東面 北 乘
輿過前之時各磬折寄輿於殿東面中央間 南 大將已

下尚不改陣實繼朝臣參進卷中央間簾取劔授掌
裏書云 尋常行幸之時掌侍等受劔重之後即起而保安四年文應元年
侍 々々多來儲候 次下輿 賴教朝臣獻 草鞋如初 入中央間至帳前右廻
延慶元年等御禊行幸時於此帳內侍受劔重之後不起伴年々殊

東面而立關白刷裾退候南方實繼朝臣執劔授掌
侍垂御簾退下次掌侍等案劔 於帳內左右机 東柄西刃 劍北聖南
竊案之東面北面座之時必置劔於右以之思之猶可置右机歟然而於平敷
座者無異儀於机者強不可有首尾歟是以任常例置左机也

〔15ウ〕

朕坐帳北更敷座茵上關白待北第一間座數疊 兩面前右大臣

束帶密參會待軟障西邊左大臣令藏人頭賴教朝臣

〔奏獻物事〕

奏山城國獻物國司不足請以內豎近衛欲供奉之狀

近代此事不及奏言

仰依請即令賴教朝臣喚大臣々々參上著御前座豫令 藏人

數官圓座 須臾內豎近衛等捧獻物列立庭前大臣問

之但良久不問之各稱物名大臣宣令賜膳部國司已下唯

〔奏見參事〕

退下但大臣又無仰旨仍國司從大臣起座退入即奏見參

〔賜祿事〕

參朕拔取文覽之覽了返給掌侍取之給大臣々々

〔還御官廳事〕

退去次給關白已下諸卿祿各有差次乘輦還宮于

時申四剋事皆如初但內侍持劍璽 而起如例諸卿誤先之騎馬不

能供奉西三剋到太政官廳入東門之時雅樂發音

聲公卿等列正廳北砌寄輿於後房南面而下右近少

將親長奏鈴諸卿不稱籍而退此時以未及昏黑也即

入內召關白及權大納言藤原朝臣 公於前令候各奏今日

之事無為剋限早速幸甚之狀須臾各退去凡今日

之儀周備無為無事已為生涯之嘉躅而從平旦雨

降天陰為大儀已為障難雖絕進退及辰一剋聊雨

脚休任運於天然鑒兆於未萌尚令幸而又於路頭定

雨聊灑雖雲頻掩爰悲歎太摧肝不德庸昧之質

耻辱已責身只念天神地祇之外無他心既而及到

〔17才〕

頓宮日景忽明天顏始霽禮儀一無虧剩西三剋

還宮中古已來其例太希稱是微力之幸尊神之

助耳歡娛滿魂感悅餘胸是天道與善乎不可不慎

不可不傾矣戍剋自院賜御書被仰今日之事無為早

速珍重幸甚之由種々之趣即報奏唯非身之幸

孝之甚之狀訖自今日始大嘗祭齋僧尼及服者等

不能參入具如式

曆應元年 光明院

大嘗會御禊

十月

廿八日己未天晴此日臨東流修禊依來月可行大嘗會也

寅四點藏人頭宣明朝臣參上催供奉王卿諸司等卯一剋

浴殿同四剋著裝束黃櫨染衣有文巡方帶 權中納言藤原朝臣 隆刷之此間天漸曙小

時奉仕每日拜於朝所南面東 第一間拜之關白遲參之間度々仰遣可早

參之由午三剋節下內大臣參入先奏賜兵仗慶之由即

著仗座令藏人頭宣明朝臣仰御前次第司次官以下御後

次第司長官以下假可令帶劍之狀此間公卿近衛將等少々

參小時關白參入仍內大臣起仗座欲就節旗之處少納言

惟清未參入云々問先例於外記之處不待少納言大臣

著節下有其例云々依之大臣即出東門著節

旗下床子即欲乘輿輿之處可候反閉之陰陽師未參

上者奇也怪也催促移剋未二剋陰陽師參上次掌侍

二人菅原成子 持劍璽出簾外 出自後房南面階東西間 母屋簾立簾前 左右 柱邊也次陰

〔頓宮行幸事〕

持劍璽出簾外出自後房南面階東西間 母屋簾立簾前 左右 柱邊也次陰

〔18才〕

〔17ウ〕

陽頭賀茂清平朝臣入自庇御簾奉仕反閉訖退下次

朕出簾外出自母屋中央間關白關白刷裾退候西第一間左

近大將藤原朝臣進立御輿寄東邊次按察使藤原朝臣經

參議源朝臣重列立正廳北砌次寄鳳輿於後房南面

關司不奏少納言不奏請鈴之由竝依神事也次藏人頭

右中將實繼朝臣進卷廂中央間御簾開輦戶取御劍安

輿內朕乘輿降長押之時以右足為先近仗不稱警依神事

次實繼朝臣安璽宮閉輦戶鳳輿出東門大將不仰御綱覽

扱之大臣起節旗下床子伺天氣復座仰兵庫寮

令打行鼓而起座先行大臣令打行鼓之儀有乘輿漸進

行大臣騎馬之後大將次將等騎馬餘供奉官出待賢門

大宮大路南行至二條此間右近大將源朝臣於陳不進之間處々

扱輿斜陽漸欲沈西嶺之比至于河原頓宮大臣著

節旗下床子少納言外記并裝束司長官權中納言藤原朝臣

率次官已下迎謁幔門之外供奉公卿列立幔門北腋

乘輿入幔門之後大臣令打靜陣鉦而入裝束司次第司依不審次不不見及也

西面南上乘輿入幔門之時大臣已下各警折神祇官大副大中

獻御麻一撫畢返給但不執寄鳳輿於御禊帷西面

先例必先幸御膳帷但御禊吉時已到之時直幸輕帷是長元

建曆正慶等例也仍今日依御禊吉時已過直幸禊帷豫承上皇勅命也

跪地上左南次將從之但次將不相分須臾關白參入實繼朝臣

而退候次朕下輿實繼朝臣步布單上入自帳後坐大床

〔18ウ〕

子東次實繼朝臣安璽箱如前關白廻東面候北第一間敷

面供御手水事一枚公卿已下著被座歎次供手水實繼朝臣撤弓箭為陪膳人自帳

為座前候大床子前五位藏人顯慶行

、先供手洗上置次椽次銀器等居次巾也陪膳悉供

大床子上次朕洗手聊向實繼朝臣取巾獻之拭手了返

給次悉撤之如供次朕移著平敷座自大床子宣明朝臣

獻笏次御巫供撫物中臣女傳取供之件撫物體次祭主從三位

大中臣朝臣親忠持御麻進出就巽角砌下授中臣女

々々々傳取獻之但節折命婦直不取之女一人相從傳授命婦一吻畢

返給不執手懸中臣女返與祭主々々授宮主先之置

御幣奠物等於河邊壇上五位藏人居關白被物先例或衝

折敷太乖例次居大臣以下被物歎次宮主居巽庭軾奏解

除詞此間上下解々繩畢宮主退引大麻於關白已下諸卿關白

歎返給笏於宣明朝臣還坐大床子自大床子前懸膝次寄腰

輿於帷西面此間始舉炬燈實繼朝臣參進執劍入輿中

次朕經初路乘輿近仗始稱警蹕左右大將早出次安璽

篔了昇進輿於北方次將等著淺履相從或著靴一說也寄御膳

帷東面中央間五位藏人二人顯藤參進卷簾實繼

朝臣取御劍授內侍掌侍等豫參居次下輿至輕帷前右廻東

面而立關白刷裾次取璽授南內侍而退本役人垂御

簾朕坐輕帷北平敷座掌侍等置劍璽於輕帷內

左右机劍北帷東面簾前舉掌燈山城國立柱松於

〔20ウ〕

〔20才〕

〔略御膳事〕

庭前須内膳司供御膳御廚子所供腋御膳而依剋限遲々

皆止之蓋有先例也大臣令宣明朝臣奏曰山城國

〔奏獻物事〕

獻物國司不足請以內豎近衛等相加令奉仕者仰依

請但近代不及奏達 豫敷官圓座於 歟然而任或記之 東面南第二間簾前次大臣參著御前座

國司以下捧獻物列立西上北面先例冊捧或冊捧也而 乃物會大臣問

〔奏見參事〕

國司稱物名但不及稱無 案內之至歟大臣宣膳部賜へ國司唯退入

大臣退下暨大臣就東面簾下奏見參掌侍成子

〔賜祿事〕

取之持參朕披見了返給掌侍々々取副文於杖自

〔還幸官廳事〕

簾下差出大臣取之退下次關白已下諸卿賜祿

各有差次車駕還宮公卿等各早出右兵衛督

藤原朝臣參議源朝臣重二人供奉次將又皆退出左右

纔四五人也尤以自由至于太政官東門神祇官獻

御麻雅樂寮舉樂還城樂下輿之儀如例劍璽役

實繼朝臣次右近少將隆清奏置鈴之由少納言成棟 不參如何右兵

衛督藤原朝臣又自路頭退出參議源朝臣一人列立

仍不問名謁即入内于時戊剋後聞參議藤原朝臣忠

還宮之時於河原落馬仍不供奉云々抑今日儀

無一事之障難事々無爲就中昨日終日降雨至

于今朝雲收霧卷蒼天高晴又及漸到頓宮之

時剋雖陰雲忽起微雨間灑即屬晴不及濕物

併是天道之感應神明之冥助也天下大慶身上

至幸不可不欣矣

今日職掌

〔22才〕

節下

內大臣 少納言平朝臣惟清 外記中原師香 清原成政

裝束司

長官權中納言藤原朝臣隆盛 不經大辨之仁也次官左中辨爲治朝臣判官 以下略之

次第司

御前長官權中納言藤原朝臣資明 右衛門督 檢非違使別當

御後長官參議藤原朝臣忠冬 判官以下略之

女御代今度不供奉 往古有例云々

供奉公卿

關白 乘車 右大將源朝臣 具權大納言藤原朝臣 公

左大將藤原朝臣良以上 大納言 春宮權大夫藤原朝臣 實權中納言藤原朝臣 長

按察使藤原朝臣經以上 中納言 右兵衛督藤原朝臣 實參議源朝臣 重

左近中將源朝臣 通

近衛次將

左

隆職朝臣 雅宗朝臣 宗清朝臣 宗雅朝臣已上 中將

公村朝臣 親長已上 少將

右

忠嗣朝臣 伊俊朝臣 實繼朝臣 藏人頭公富朝臣已上 中將

公世朝臣 定宗朝臣 資英朝臣 隆清已上 少將

永和元年 後圓融院

大嘗會御禊

十月

〔23才〕

廿八日、天晴風靜今日大嘗會御禊也自寅下剋夢

醒向糝臺 此間仰遣奉行許云至只今遲參何事哉 卯一點

浴殿即著裝束 黃櫨染、水季朝臣奉仕之 先是遣大閣亭狀云

自去夜可有祇候之由被申處無其儀條如何只今已著

裝束關白大將各相伴只今即可參之由仰之處即被

〔御拜事〕
參即向休所裝了先於朝所奉仕每日拜如去夜儀

于時辰四點此後大閣被參衣冠下括參候東第一間

相語有酌盃先達奉行職事頭左大辨藤原朝臣

宣方參于時已一點兼取松明可參之由令申之處以外

遲參太以奇也怪也為催促諸司歟然至午四點諸

司雖一人未參頗絕常篇此後少々如出納者參歟關白

參者雖不相待時節下文保例先可出東門由談大

閣雖然關白猶以遲參歟自未明遣手狀雖責伏令

遲々言語道斷事也節下許ニモ同遣狀畢然而遼

遠之間未及返事未剋關白參前追音一聲如何過事歟

候後房廂東頭此後即節下右大臣 忠基 參徘徊關

白座邊先々關白外參仕人皆徘徊朝所邊頗不審之

〔此間正廳昇廊顛倒見物雜人數百人許昇之故顛了無殊事〕

由大閣示之小時著陳 陳座疊 遲々故云々 令藏人頭宣方朝臣御前

次第司以下御後次第司長官以下假可令帶劍之狀先是

權大納言藤原公永卿以下漸參集先奏慶此間次將少々

〔頓宮行幸事〕
參仍朕則出自後房母屋中央間關白褰簾藏人頭

藤原朝臣長宗獻草鞋內侍二人出左右簾外左ノ內侍八持

〔24ウ〕

劍 寶劍粉失以後貞治行幸六條殿依初而被用畫御座 右內侍雖

雖不持璽筥 依粉失 於爰其禮之故也且男官女官禮

也頗如左內侍進退此間右大臣著節旗下床子歟其

儀不見及委可尋記次陰陽頭賀茂在弘朝臣入自庇東

第二間 階次 奉仕反閉退下次闡司次鈴奏 但依為神事無奏

次公卿列立正廳北砌歟但雜人宛滿之間不見及可

尋記次寄鳳輿於後房南面中央間次將等相從 人數

尋知此日左近大將藤原朝臣 師嗣 次々見御輿覆歟 但委不見 主殿

官人撤彼覆次參議右近中將藤原朝臣置弓於御輿

寄西邊開輦戶經筵道東入自當間膝行取劍安

鳳輿之前方 南柄 置弓在 頗退候 所也 次朕步布單上乘

輿 先脫左方草鞋懸膝則 進右方足安座 膝行也 出東門 次將相 進北暨扱之

右大臣起節旗下床子伺天氣 但鳳輿頗遠之間、委細不見作法御輿長無故實歟

復座仰兵庫寮令打行鼓次大臣起座前行於待賢

門內各騎馬出門漸程左近大將藤原朝臣參會即騎馬

〔御輿至頓宮事〕
大臣等騎馬以前 於路頭取松明子一剋許到川原頓宮裝

束司長官權中納言藤原朝臣保光次官左少辨藤原宗

顯以下列立幔門外大臣以下供奉諸司等下馬歟此

間事更不能見及寄鳳輿於御禊幄西面 先例必先 幸御膳

幄但時剋到之時直幸御禊幄近來 中央間掃部寮敷筵

道安鳳輿即宣方朝臣參關白未被參若相待彼參入

可有下輿歟之由伺之剋限彌可遲々不可相待之由仰之

〔25ウ〕

仍即冬宗卿參進開輦戶御儀取劍入百子帳後

屏風安同帳大床子左方東柄抑件帳後屏風頗開

付南北柱只開是まてにて可有歟或取劍次將開今度兼開之冬宗卿置劍

畢退候次藏人頭右大辨藤原朝臣長宗參進獻草

鞋朕步布單上入自帳後著大床子座東面長宗

朝臣取草鞋此間關白參入著御座之次即座南面

次將引陳陳右次將不見如何引陳事年來之例也近代或不然然而非本儀之間今度兼所仰

舍奉行此間大臣以下著祓座降雨之間各取笠次將引陣之時同之次供御手水

今度略打敷久壽仁安正慶等度供之歟然而於正慶度者不可供之由兼雖有沙汰忽供之仍非無先規

陪膳長宗朝臣參進候大床子前役送五位藏人右少

之間不能禁止之由見御記仁安雖供之彼度記文先例不然之由難也

後任左衛門權佐經重不撤箭劍等先供水水次棟次中長宗朝臣各取之

置大床子上次膳洗手長宗獻巾乍持手朕拭手了

返給次如初次第撤手水具次朕移著大床子前平自大床子前方降著之

敷座藏人頭左中辨宣方獻笏自右方令進之次中臣女

參進候平敷右方御巫子三人代々至正慶度四人而久壽一人曆應有沙汰二人今度

任彼例可爲二人之由兼仰含之處頗相違三人尤不得其意二人ハ各取撫物一人取

中不供水水之時取之不審尙可尋先例

取贖物授中臣女々々々悉取之但悉不取之女一人有傳之太不可然曆應度如此歟尤不可然之

置朕前座次祭主忠直朝臣捧大麻授中臣女命婦取

獻之朕一撫一味懸笏首返給命婦又返給祭主此後

五位職事經重置關白祓物大臣以下祓物次第置之

〔26才〕

〔依降雨被略獻物事〕
問以彼朝臣申趣合申合關白之處任彼例被略之條不可有巨難之由被申之仍即可略之由返答了

歟不見及祭主奏解除詞著異庭賦歟之後撤贖物不見及

次還座自大床子前方大床子先返給笏於宣方朝臣遲參

〔幸御膳幄事〕
問密間密安座後即可幸御膳幄之處雨未休之間爲腰

目之了輿者不可叶可爲何樣哉之由宣方朝臣申之可申含關

白之由仰之處腰輿供御雨皮先例可被尋官之由

被申云仍即可相尋巨仰之先規只今雖不分明

供之例存之樣覺悟之由申之云仍此定宣方朝臣申

沙汰歟頗經程之後寄腰輿於幄西面冬宗卿逐電令早

〔劔璽將逐電仍他人歎之事〕
不歎終其役條

凡奇怪不可思議事也問左中將親雅朝臣參進取劍進自百子帳左方自

竊自後方可取之由示然而尙自帳南座左取之爲朕言詞不聞歟如何

凡開帳後屏風置劍事定事歟然者何至還御之時目前方易本

聞其尙能々々可相尋先規者也安腰輿如初置榻次朕經本路乘輿

宣方朝臣供草鞋進北方寄御膳幄東向中央間北向安之如何

關白刷裾宣方朝臣供草鞋進北方寄御膳幄東向中央間先例尤不審

次本役人參進取劍先例卷御簾之後取劍授內侍歟正慶度

中央間簾取劍授掌侍又曆應御記五位藏人二人顯藤參

進卷簾頭中將實繼朝臣取御劍云文和度指圖兼、四面

懸簾云今度一向不懸歟如何何樣不垂御簾之間直

取劍裝束司以下授所立北方之內侍豫居帳北方平敷左右先例

此間如御禊幄時次將等引陳處各早出之間無其儀

輿如元居朕著輕幄內膳椅子近例必不然正慶曆應小時

〔27ウ〕

〔被略御膳事〕

移著同帳北方平敷座次内膳司御厨子所等可供御膳

處依剋限之遲々略之近曆應如此次右大臣自東面

〔奏見參事〕
向之自南第一間簾下奏見參内侍取文杖奏之朕取

之披見 此儀先規雖不分明
今案作法也蓋如吉書時等也 畢返給内使取副杖如元返

〔還幸官司事〕
給大臣次寄鳳輿於幄中央間 今度
北面 親雅朝臣取劍安輿内

如恆次朕乘輿此間關白以下各退出歟供奉人上下

早出參議右衛門督藤原朝臣顯保 次第司
次官 次將親雅朝臣

許也自由尤奇也怪也歸太政官司寄鳳輦

於後房親雅朝臣參進開輦戶取劍欲授内侍之處

内侍未自頓宮不歸參尤不可說歟小時下輿藏人左

〔本宮還幸事〕
衛門。佐經重獻草鞋候裾即可歸本宮之處參議藤原

基光卿兼可參之由申之間令催促之處使者頗

移時剋良久歸云他行 云々 甚以奇怪々々此後即

歸本宮于時丑下剋也

(29才、以下空)

┌ (29才)

┌ (28才)

┌ (28ウ)